



幼い時の記憶がふとよみがえることがある。生まれ育った地域は、ふたつの大きな河川が合流する近くにあたり、扇状盆地が形成されていた。そうした地形が影響するのだから、春や秋には霧が立ち込める日がしばしばあった。

小学校まで数キロの通学路は、田んぼや桑畑に沿った小径を往く、用水路に架けられた一枚岩の石橋も渡ってゆく。四方を豊かな山並みを取り囲み、厳冬期に至れば、手前の山並みの背後には息をのむほどに神々しく雪化粧した大山脈が屏風の如く屹立する。そうした風景が日常であった。

霧は朝方に多く発生し、時に通学時間にも及んだ。濃霧の際は数メートル先も見通せないほどとなる。通い慣れたはずの道中が一瞬にして迷路と化し、いつもの空間は非日常へと転じた。この濃霧の中に分け入れれば、まさに五里霧中の大冒険。いつもの数倍も時間と体力を要してようやく校門にたどり着けば、高揚感と安堵感で胸はいっぱいになった。しかしその霧も短時間でその様相は一変、何事もなかったかのように日常が戻ってきた。

登校時の霧は、事故を誘発しない程度の自然現象であった。真意はどこにあるか。「裹げる」とは、裾や幕をかき上げることである。薄絹のような霧を丁寧にかき上げてゆくと、そこには燦然たる仏の教えが森厳なさまを伴って展開している。そうした時、霧は単に排除すべき対象ではなく、至上の宝物を守護する荘厳具ともなり得てくる。大師ご自身が体感された大自然との交わりや修行成果の一端を味わえる名文である。

別の経には次のようなものもある。

心相は測量し難し 心は月輪の輕霧の中に あるが如し

悟りの心とは、煩惱に左右されがちで推し測ることが難しい。しかしそれは喩えるならば、丸いお月様がうっすらと霧に紛れているようなものという意。ここでも月がすべて隠匿されているとは説かない。ぼんやりではあるが、まああるお月様が見えている、それは私たちに内在する善なる可能性を暗示し、仏と衆生の平等性を謳うものであろう。輕霧・霧・霧を裹げるといい、どちらかが深い境地を捉えんとした絶妙な表現に思えてならない。

ものか、あるいは危険性をはらみながらも運よく遭難しなかっただけなのか、今となっては定かでない。霧は平地に限らず山岳や海上といった各所で発生し、事故の報告も多い。あるいは霧による農作物への被害も耳にする。いささか負の印象を与えられがちな霧であるが、その幽玄さは人々の心に何らかの影響を与え、写真や絵画などの芸術へと結晶する。

霧の一語を用いた弘法大師の一文をここに引く。

霧を裹けて光を見るに無尽の宝あり

自他受用 日に彌新たなり (『秘蔵宝鑰』上巻)

真言宗のすばらしさを内外に公開論証した著作の序論部分。

「光」も「無尽の宝」も真理たる仏法を指し、その仏法の御利益を誰もが蒙り、ますます仏法が繁栄せんことを願う意である。

真理を覆い隠す煩惱＝霧とみなすことは平易なことだが、それならば霧を払う、退散や滅除などに似た表現方法を採用ばわかりやすい。しかしあえて「裹けて」と表現された大師の

私たちは常に迷っている。世界中が迷っているから、三界火宅なのである。迷いの根本は貪り、瞋り、愚かさの三点にありと積尊は喝破され、これを三毒と喩え称した。私たちはこの迷妄な毒によって真実の眼を覆われているものの、決して真つ暗闇ではない。うっすらと霧に包まれた清浄な月を観ることができ得ると。お釈迦さまもお大師さまも知り得た、この真理こそが、この世と次の世をも照らす光明なのである。

道草をして口にした桑の実がなつかしい、立派な石橋は姿を消し、小径は車も通る舗装路となった。幼き記憶と風景もまた儚きものではあるが、叶うとすれば、もう一度あの深遠な霧の中を往きたい。きっと霧と光の扉が待っているはずである。

ご信徒の皆さまにも、日常の中に秘められた真実の教えに触れることは可能である。お不動さまの智慧は秋の十五夜の如く、暗々と私たちの内と外を照らしている。澄んだ天空を仰ぎながら、自らの信心をより堅固にと誓い念じたい。



**修正会 1月1日～1月7日 ●御本尊御開扉大護摩供【本堂】**

●おつとめの時間が普段とは変わります。寺務所にて早めにお申し込みくださいますようお願いいたします。

	午 前						午 後					
	0時	1時30分	7時	9時30分	10時	10時30分	11時30分	1時	1時30分	2時	3時	4時
1日	●	●	●	●		●	●	●		●	●	●
2日・3日			●	●		●	●	●		●	●	●
4日～6日			●		●		●		●		●	
7日			●	●		●	●		●		●	



「開運赤札守り」は、正月三ヶ日にお護摩祈祷に本堂に上られた方に進呈いたします。

●正月三ヶ日のあいだ、境内にて「新年よろこぶ茶」のおせつたいを予定しています。



一月一日(月)～七日(日)

# 修正会

御本尊御開扉大護摩供 厳修

瀧谷山では、令和六年元日から一月七日まで修正会を厳修いたします。

修正会では、年頭にあたり世界和平・五穀豊穰・萬民豊稔を祈念し、あわせてご参詣の皆さまのお願い事を祈願いたします。

修正会期間中は、御本尊不動明王のお厨子を開扉し、お護摩祈祷をおつとめいたします。一年の家内安全・厄除開運・社運隆昌・商売繁盛などをご祈願なさって、新たな気持ちで新年をお迎えください。

●修正会期間：元日～七日  
●ご祈祷料：…五千円より





## 新年護摩のご案内

新年護摩は、修正会期間中(元日より七日まで)毎朝おつとめする所願成就のご祈禱です。ご家族・ご縁者の皆さまの一年の吉祥をお祈りし、無病息災・身体健全・開運招福など、お一人お一人の願い事を紙札にお書きしておつとめします。

- 祈願料：一本 二千元
- 締切：十二月二十日
- お申し込みは、同封の用紙にご記入の上、寺務所までお持ちいただくか、ご郵送ください。
- 紙札のお渡しは修正会終了後の一月八日以降になります。お受け取りの方は直接寺務所までお越しください。郵送ご希望の方は一月十日以降に順次お送りいたします。



## 新春 交通安全祈願

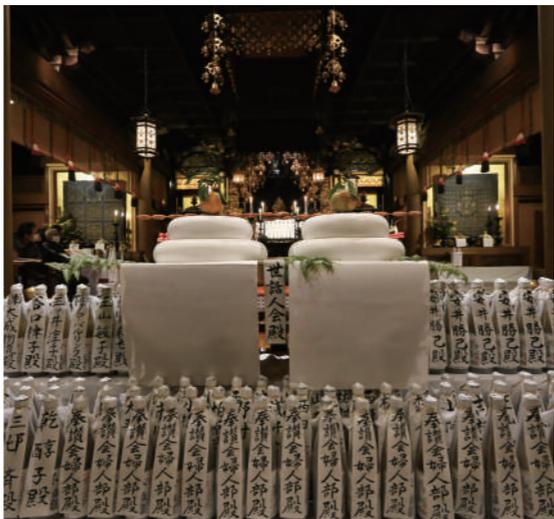
修正会期間のうち、一月一日から五日の間は明王殿にて、六日以降は平常どおり法楽殿にて、交通安全祈願をおつとめしております。期間中は瀧峰大護摩講の修験者によるお車加持が執り行われます。新年の初めに、どうぞ一年間の交通安全をお祈りください。

● ご祈禱料：一台 五千円

1日	午前0時～午前1時30分	明王殿
2日～5日	午前7時～午後5時30分	明王殿
6日以降	午前9時～午後4時	法楽殿



## 聖酒「不動力」ご奉納のお願い



瀧谷山では、お正月の聖酒お供えとして「不動力」を奉納していただいております。お供えいただいた方には、おさがりとして「不動力」一合瓶をお持ち帰りいただけます。聖酒には奉納者のお名前を浄書した短冊を付けて、修正会のあいだ本堂外陣正面にお供えます。

- 奉納料：一本 三千元
- お申し込み：寺務所
- 郵送でのお申し込みの場合は、新年護摩申込用紙裏面の通信欄をご利用ください。寺務所にて受領証と引き換えにおさがりをお渡しします。

● 一月一日から五日は、明王殿前の第一駐車場は交通安全のご祈禱専用となります。ご参詣の皆さまの駐車は山上駐車場をご利用ください。



## 新春 滝不動堂護摩供

元日から一月三日まで、滝不動堂では瀧峰大護摩講の修験者により護摩供が勤められます。山伏による宝剣加持もございいます。

滝不動堂で焚かれる添え護摩木はお滝受付でお申し込みください。添え護摩木一本につき黄色い護摩札を一枚お渡しします。黄色い護摩札を三十六枚集めると御幣一本と引き換えしております。御幣の引き換えは一願不動堂の受付までお申し出ください。

- 滝不動堂護摩供・宝剣加持  
元日～一月三日  
午前九時頃～午後三時頃
- 護摩木：一本 三百円



新春の縁起物のご案内

新年の縁起物として、矢守・熊手をお授けしております。  
 矢守・熊手は十二月二十八日より御膳場にご用意しております。また元日より干支みくじもご用意いたします。これらは迎春期間中(二月十五日まで)お授けしております。  
 矢守や熊手は、仏壇や神棚に限らず、鴨居や棚の上などの高いところにお祀りして、一年の災難消除や開運招福をお祈りください。



瀧谷山の四季 ⑥

緑の多い瀧谷山も今年の夏は酷暑でした。ようやく残暑がおさまりツクツクボウシの声も静まり、今ではコオロギももうほとんど鳴いていません。陽が短くなるにつれて、夏の疲れが出てきたり下半身が冷えたりして、気分もすぐれない。そんなときは身体を軽くほぐして、みぞおちを緩めるのがよさそうですね。「ぶらぶら体操」をしてみましょう。まず少し足を開いて立ち、膝をゆるめます。手先が床に触れるまで前屈して、腰から上体をだらりとぶら下げるようにし、力を抜いてゆっくりと前後左右にゆすります。そのまま上体がぶらぶらとゆれるにまかせましょう。次に上体を起こし、左右の腕が胴体に巻き付くように膝を使って身体をゆすり回します。できるだけ力を抜いて、動きに合わせてゆっくり呼吸するのがコツです。徐々に動きを小さくして、深呼吸して終わります。気持ちさが静まってくると、周囲で鳴いている鳥の声や風の音がよく聴こえてきます。騒いでいたヒヨドリの声も静まって、いつもより晴れやかな気持ちです。清々しい瀧谷山の空気を吸い込みに、どうぞお参りください。

特志寄進者御芳名(敬称略・順不同)

- 堺市 東大阪市
- 堺市 奈良県
- 大阪狭山市 兵庫県
- 富田林市 和泉市
- 福岡県 奈良県
- 河内町 大阪府
- 泉佐野市 和泉市
- 大阪府 堺市
- 堺市 堺市
- 富田林市 河内町
- 河内長野市 河内長野市
- 箕面市 岸和田市
- 河内長野市 大阪府
- 大阪府 八尾市
- 大阪市 岸和田市

観音堂鰐口緒奉納(敬称略)

- 松原市
- 羽曳野市 河内長野市
- 堺市 奈良県
- 柏原市 羽曳野市

玉垣寄進者御芳名(敬称略・順不同)

- 羽曳野市 河内長野市
- 堺市 奈良県
- 柏原市 羽曳野市

瀧谷山温故知新 ③

瀧谷山の音

視覚情報を中心にする現代社会にあって、今でも瀧谷山では板木を叩いたり半鐘を撞いたりして音で合図をすることが多くあります。もともと仏教で使われる法具は楽器の一種でもあるものが多く、寺院では音を聞くことが重要な位置を占めていると言えるでしょう。

いう小気味よい音が鳴ると条件反射的にお腹が鳴ったものです。禅寺でも梆や雲版と呼ばれるものを叩いて食事の刻を告げる習わしがありますが、本堂の半鐘や太鼓、鐘楼堂の大鐘と区別するため、食事の刻を知らせるには板木が使われるのでしよう。

本堂の縁側に吊り下げられている半鐘は、毎回のお護摩が始まる際に、また朝一番の交通安全のご祈禱のお申し込みがあったときの合図として使われます。実はこの半鐘、元文四年(一七三九年)に祐清法印によって造献された由緒あるものです。銘には



半鐘

数々の事績を残された方です。江戸時代前期は政治が安定して世の中が活気を取り戻し、とくに元文年間には時代劇でも有名な大岡越前守が寺社奉行を務め仏教を保護したため、あらたに寺院が多く建立され、仏教が興隆したのです。祐清法印が住職を務めた時代に瀧谷山も復興が進み、今日の境内地の基礎が固まったのでした。この半鐘は、このころから毎日欠かさず本堂のお護摩の刻を知らせてきたのです。

寺務棟玄関に掲げられている、大きな鯛の形をした板木は、かつては庫裡の廊下にかけてられ、お昼ごはんの準備が出来た知らせに叩かれていました。この板木は、文人であり絵心のあった先々代・實乗老僧がささつと筆描きされたものをもとに彫ってもらったもので、櫂の一枚板で出来ています。どっしりとした独特のおおらかさのある板木は愛嬌があり、コンコンと



板木

河州錦部郡 瀧谷山明王寺  
 巳元文四年  
 為法界菩提  
 未九月二十七日  
 願主祐清  
 とあります。祐清法印は江戸時代前期に瀧谷山の住職を務め

数々の事績を残された方です。江戸時代前期は政治が安定して世の中が活気を取り戻し、とくに元文年間には時代劇でも有名な大岡越前守が寺社奉行を務め仏教を保護したため、あらたに寺院が多く建立され、仏教が興隆したのです。祐清法印が住職を務めた時代に瀧谷山も復興が進み、今日の境内地の基礎が固まったのでした。この半鐘は、このころから毎日欠かさず本堂のお護摩の刻を知らせてきたのです。

猛烈な酷暑もようやく去り、朝晩は冷え込むようになってきました。紅葉の季節がやってきましたね。境内のもみじも色づき始めている。

さて、この時期になりますと、瀧谷不動尊の朝は落ち葉掃きから始まります。山内にはそこかしこに木々が繁り、延々と降り続く落ち葉。長い竹ぼうきを使い、それぞれの樹下に簡単に落ち葉をまとめて、ちりとりで取って……という段取りで動いているけれど、振り返るとさつき掃き清めた箇所にもまたくさんの葉が散っている……というわけです。

仏教においても掃除は大切です。お釈迦さまのお弟子さんである周利槃特しゆりはんとくという方は仏教の教義を理解するほどの学はなく、お釈迦さまの説かれた有難い言葉も、ただ練習しても一向に覚えられなかったとされます。この事実には、周利槃特本人も自分は何んと愚かで鈍いのだろうと思ひ、隠れて泣いていました。これに気づいたお釈迦さまは「愚かと言われる人でも、みずから愚かであると言う、このように理解できている人はむしろ智者といえる。みだりにみずか

らを智者だと称する者こそが真の愚者である」と勇気づけます。

そんな彼はお釈迦さまの指導により、「我れ、塵を払わん、我れ、垢を除かん」というごく短い言葉を授けられますが、それですぐには暗記できなかつたとされます。代わりにお釈迦さまは、まさしくこの言葉の通り、掃除という行いを彼に課します。他の修行僧たちの履物を徹底的に拭き清めさせました。のちに塵や垢とはまさしく煩惱のことであると理解し、この句を自分の物にした周利槃特尊者は、やがて煩惱をこごとく取り去ったと伝えられています。『根本説一切有部毘奈耶』

どのようにしたら煩惱を取り去ることができるのでしょうか。具体的な方法については仏教の長い歴史の中でさまざまな主張が打ち立てられ、坐禅、瞑想、念仏など多岐にわたたり、一概にはいえません。掃除というののも一つの手かもしれません。

煩惱には様々な側面があります。わたしたちの心身を惑わし、悩ませ、覆いつくし、束縛し、汚すもの。そのように考えられています。わたしたちは煩惱の汚れにまともわりつかれ、覆われていますが、けっして、もとか

ら心に煩惱が存在しているとか、生まれながらそのように愚かであるとかいうわけではありません。

煩惱は時に「客塵煩惱」とも呼ばれます。この客塵という語は耳慣れないと思いますが「偶然にやってきた」というようなニュアンスを持つています。要するに本来そこにはないものが不意にやってきている。そのような状態にある塵、つまり汚れです。ほうきでサッと掃き清めることができたら、周利槃特尊者のように拭き去れたなら。

あたかも金銀宝石の汚れや曇りを拭き去るように、取り除いたならば、まばゆい光を放ち、もとよりそこにある価値が見えてきます。わたしたち一人ひとりも、このようであり、煩惱の汚れを取り除くと清らかな本性があるのです。

あるいは逆に、そのような宝を持っているのに汚れに埋もれてしまっているともいえるのかもしれない。

除夜の鐘の響きには邪気や煩惱を払う力がある、といわれています。瀧谷不動尊では来たる新年もお参りの皆さまの手で、除夜の鐘を撞いていただけます。それぞれの思いを込めて鐘を撞き、清らかな新年をお迎えください。

お寺のごはん

14 冬至のかぼちゃ

かぼちゃは一年中出回っていますが、やはり収穫期の夏が一番おいしいようです。にもかかわらず冬至の日にかぼちゃをいただくのは、冬のビタミン不足を補うため、季節外れのものでも昔は貴重だったということなのでしょう。水気が抜けた冬のかぼちゃも、胡麻ぬたを添えますとおいしくいただけます。



材 料 ●かぼちゃ ●胡麻 ●砂糖 ●醤油 ●昆布出汁

- かぼちゃは適当な大きさに切り、蒸し器で火が通るまで蒸します。胡麻は雪平鍋でゆっくりと、ほんのり茶色になって芳ばしい香りがしてくるまで煎ります。すり鉢に移し、香りが立って滑らかになるまでよくすり、砂糖と醤油を入れて全体をなじませます。とろりとするくらいの固さに昆布出汁で伸ばして味を調べてください。
- お鉢にかぼちゃを盛り付けて、胡麻ぬたを添えます。上からかけても、かぼちゃの下に敷いてもかまいません。ししとうの素揚げや茹でた三度豆などを添えると、彩りよく一層おいしくいただけます。

「かぼちゃはお鍋にお出汁をかけて煮る準備をしておいてから畑に取りに行くくらい新鮮な方が美味しい」というお話を聞いたことがあります。